

アリシアには前世の記憶というものがある。

いや前世の記憶というのは正しくないかもしれないが、確かにアリシアの中に別の人間の記憶があった。その人間は女性で日本と呼ばれる国に生まれ育ち、社会人としてあくせく働いていたようだ。しかしある日の帰り道に交通事故に遭い亡くなってしまったらしい。そして気がついたらこの世界で赤ん坊になっていたのだ。しかも侯爵家の娘として。最初は混乱したが、どうも自分は転生したのだという結論に至った。そして、親が金持ちで豊かな人生が送れるものと喜んだものだ。

ところがどっこい。人生はそう上手くいかないらしい。赤子の顔から少女の顔へと変わっていく過程の中で、自身の顔が見たことのある顔へと近づいていることに気づいたのだ。

プラチナブロンドの髪に白磁のような肌、エメラルドのような深い輝きを持つ瞳と整った目鼻立ち。冷たいフランス人形を思わせるようなこの美少女は、前世の彼女がやっていた乙女ゲームに登場する悪役令嬢そのものだったのだ。

「聖女の祈り〜Prayer of the Heart〜」は前世の自分のお気に入りのゲームだった。

現代から召喚され聖女として役割を与えられたヒロインが、貴族の学園を中心に様々な困難を乗り越えた末にヒーローと結ばれるのが大まかなストーリーである。

ゲームに登場するアリシアはヒロインを虐める嫌な女だ。王太子の婚約者である彼女は権力を振りかざし、ヒロインをいじめる。困いの令嬢たちを使ってヒロインの良くない噂を流したり、時には命にかかわるような事故に遭わせたりしていた。しかしそんな悪事をものともせずヒロインは乗り越え、最後にアリシアは罪を暴かれて断罪されヒロインと攻略対象は結ばれることになる。なんともまあテンプレ的な展開だと感心するばかりだが、残念なことにアリシアはどのルートでも最終的に悲惨な目に遭う。一番酷い結末では死刑になってしまう。

アリシアはそんな自分の運命を思い出して絶望し、しばらくの間寝込んだほどだ。

そして、次に起きたとき決心した。

(絶対に平和に生きてやる！)

幸いにも今世は両親ともに健在であり、経済力もあるため生活には困らないだろう。また侯爵家で歴史もあり資産も多い方なので没落することもないだろうと思う。ならばあとは自分の行動次第なのだと考えた。

人に恥じない生き方をしよう。ヒロインをいじめるなんて絶対にしない。

せっかく異世界に生まれたんだもの。このまま死ぬなんて御免よとアリシアは思った。

「アリシア様！」

「シャルロット、急に抱き着いてくるなんてはしたないわ」

昼下がりの午後。学園にあるサロンで紅茶を飲みながら本を読んでいたアリシアの元に、金髪の少女——シャルロット・マルシャン伯爵令息が勢いよく飛び込んできた。

窘められたシャルロットは「ごめんなさい」と言いながらも嬉しそうにはにかんでいる。まるで花が咲いているかのような可愛らしさであった。さすが乙女ゲームのヒロインといったところだろうか？ 彼女の愛くるしい笑顔を見て思わず口元が緩む。

「だって……最近ずっと忙しくてお会いできなかつたんですもん。寂しかったんですよ？」

頬を膨らませている姿はとても可愛い。つい頭を撫でたくなってしまいが我慢して話を続けることにする。

シャルロットが聖女としてこの世界に召喚され、学園に通うようになって一年。最初、彼女は違う生活に戸惑っていたものの次第に慣れたのか、元来の明るく心優しい性格もあって今ではすっかり溶け込んでいるようだ。本来のストーリーではアリシアがシャルロットをいじめていたのだが、私は彼女をいじめる気なんてさらさらないので、なんの障害もなく学園生活を楽しんでいるようだった。むしろ私の方が彼女に振り回されているくらいだ。

この世界の知識がほとんどない彼女が何かやらかしそうになる度にフォローしてあげてきたからだと思うが。今では手のかかる妹のように思っている。お茶会に招いたり、勉強をみてあげたりと仲良くしていたのだ。けれど、最近は彼女からも距離を置きがちだった。その理由は――。

「アリシア」

ふと声をかけられ顔を上げるとそこには金髪碧眼の美少年がいた。その人物を見た途端に私の心臓は大きく跳ね上がる。

王太子殿下であるウィルバート・エレストラム第二王子殿下、このゲームの攻略対象キャラクターの一人である。

「ウィルバート様ノクロード様も一緒ですか!?」

「ああ。シャルロット、君に会いに来たんだよ」

そう言って微笑んでくれる彼は眩しいほどのイケメンスマイルを向けてくれる。小麦色の柔らかな金髪と澄み渡る青空のような青い瞳の組み合わせは本当に美しいとしか言い表せない。それにいつもはキリッとしている眉毛も今は優しく下がっていてとても穏やかだ。

うっとりで見惚れてしまうが、慌てて表情を引き締めると彼に向けて礼をする。彼は私に視線を寄越すとフツと笑った。

「アリシア、よろしければご一緒させていただいても？」

「……ええもちろんですわ。どうぞこちらへ」

私が合図を出すと控えていた従者が椅子を二つ用意してくれた。それを確認した後、彼に座るように促す。そして自分も席に着くと優雅な仕草でティーカップを手に取り口に運んだ。

「クロード様も座ってください！」

シャルロットが隣の椅子をポンと叩きながらそう言うと、黒髪赤目の青年は表情を変えず答える。

「いえ、私はここで結構です」

「もうっ！相変わらず硬い人ですねー」

ぷくうと頬を膨らませるシャルロットに対して、淡々と対応する彼の様子は傍から見ればあまり仲が良いようには見えないかもしれない。けれど、クロードの目元が少し緩んでいるのを見れば、良好な関係を築いていることがわかるはずだ。

(私にも兄がいたら、こんな感じなのかしらね)

そんなことを考えつつ、二人のやり取りを眺めていると、ウィルバートが顔を覗き込むように話しかけてきた。

「アリシア嬢。今度の週末は空いているかな？よかったら一緒に出掛けないかと誘いたいんだが」

「……申し訳ありません。先約がありました」

本当は予定など入っていないが、攻略対象であるウィルバートと出かけるのはなるべく避けたかった。なのでこうやって断ることに決めていた。

「それは残念だ。ならまたの機会にしようか」

「……恐れ入ります」

あつさりと引き下がるウィルバートの様子に内心ホツとする。それもそうだ。ウィルバートとアリシアは国の利益を考えて婚約しているだけで、アリシアを愛しているわけではないのだから。無理に婚約者と一緒にいるよりもシャルロットのような癒し系ヒロインと楽しく過ごした方が楽しいに決まっている。ゲームでもヒロインと手をつないでお忍びデートしていたし。

(私もどこか出掛けようかしら)

そんなことを思いながら紅茶を口に運ぶ。

アリシアは馬車に揺られながらぼんやりと窓の外を見ていた。整備の行き届いた王都の街並みが過ぎ去っていく。

侍女を連れて買い物に出かけるなんて久々だわと思いつながら、アリシアは小さくため息をつく。街中で発生する恋愛イベントは少なくなく、下手に鉢合わせするのは良くないと考えて最近では外出を控えていたのだ。けれど、めっきり外に出なくなってしまったのを

両親や家の者が心配し始めたので、今日は久しぶりに街に出ることにしたのである。それに今年度の卒業パーティーに向けてドレスを用意しなければならなかったし、ちょうどいい機会だった。

「お疲れになりましたでしょうか？」

向かい側に腰かけていた侍者の一人が、アリシアの溜息を聞いて気遣うように声を掛けてきた。アリシアは首を横に振る。

「大丈夫よ。気にしないで」

そう答えてニコリと笑う。侍者は心配したような顔のままではあったが、一応納得はしたようでそれ以上は何も言わなかった。ゆっくりとスピードを落とし、馬車が止まる。目的地に着いたようだ。アリシアが降りると、目の前にはシェルピンクを基調とした可愛い建物があつた。侍女が慣れた手つきで、扉を開ける。中に入ると、店員たちが出迎えてくれた。オーナーのマダムクレアが歩前に出て優雅にお辞儀をする。

マダムクレアの「ブティック・リユンヌ」はこの国の上流階級の女性の間で大人気の店だ。流行りを押さえつつも品の良いデザインが売りで、王妃御用達のブランドとしても有名である。アリシアも幼い頃からよく利用していた。

「ようこそおいでくださいました、アリシア様」

「ごきげんよう、マダムクレア。早速だけど、卒業パーティー用のドレスをデザインしてほしいの」

「まあ！卒業パーティーの？王太子殿下のパートナーを務められるんですものね。気合を入れないと！」

「……ええ、お願いするわ」

そう言って彼女は張り切った様子を見せた。それからすぐにいくつか候補のデザイン画を書き出していく。アリシアはそんな彼女の姿を見て、少し申し訳なく思った。

嬉しそうなマダムには悪いが、私がウイルバートのパートナーを務めることはないだろう。

（シャルロットはウイルバートのルートに入ったようだしね）

先日の仲睦まじい様子を見るに、シャルロットに対するウイルバートの好感度は高い。おそらくこのままいけば、卒業パーティーでウイルバートと入場するのはシャルロットになるだろう。彼女はこの世界の主人公なのだ。彼女がシナリオ通りに進むならば、私はウイルバートとの婚約破棄を言い渡されるはず。そして私は一人でそのシナリオを退場することになるだろう。

（王太子から婚約破棄をされてしまえば私の価値は下がってしまうけれど、こちらに非がないものであるので陛下も取り計らってくださるでしょう。それでなくてもうちは侯爵家だし、つながりを持つことで利のある家が多い）

そうして、私とウィルバートとの縁は完全に切れることになる。もともと政略結婚であり、愛情はなかったのだから未練は、ない。ふと、飾られた宝飾品が目に入る。中央に飾られたネックレスに琥珀色に輝く石があしらわれていた。

(綺麗な宝石……。まるで――)

そこでハッとする。慌てて頭を振った。何を考えているのかしら、私。もう終わったことなのに。

「アリシア様、いくつかデザインが出来上がりましたわ！」

「あ、ああ。ありがとう、見せてくれるかしら」

「はい！」

そう言うと、マダムはテーブルの上に広げていたデザインを一つ一つ説明してくれる。どれも素晴らしい出来であった。その中の一つに目が留まる。

それはアリシアがゲームの中で着ていたドレスのデザインとよく似たものだった。真紅の生地^{生地}に金の刺繍^{刺繍}が施されており、所々に黒いレースがあしらっている。胸元が大きく開いてとてもセクシーだ。まあ、いかにも悪役令嬢といった感じのドレスだ。もし私

がゲームの中のアリシアのままだったら、これを是が非でも選んでいたに違いない。けれど今の私の心境では、これを選ぶことはできなかった。

「あら、このドレスが気に入りました？」

「……いえ、他のものがいいわ。そうね、例えばこっちとか……」

そう言いながら、別のデザインのもの指差す。それは淡い水色をした美しいドレスだった。胸元はレースで覆われているが透け感があり詰まった感じはない。またスカート部分は緩やかなラインで裾の方に行くにつれて色が濃くなっているグラデーションが特徴的だ。他にも刺繍やビーディングも繊細かつ上品に施されている。デザイン自体はシンプルだが、細部までこだわり抜かれた一級の品のドレスであることが分かる。マダムは「まあ！」と声を上げて目を輝かせた。

「素敵ですわ、アリシア様にピッタリ！」

「そうかしら」

「ええ！お似合いになりますよ」

「そう……」

マダムの言葉に、アリシアは少しこそばゆい気持ちになった。前世でも店員さんに似合うと言われればお世辞と分かっているけど嬉しかったものだ。アリシアは思わず笑みを零した。

「それじゃあ、それにするわ」

「はい、承りました！」

マダムは笑顔で答える。それからすぐに店員を呼び、デザイン画を持っていくように指示した。店員は恭しく頭を下げて奥へと引っ込んで行く。マダムは満面の笑みで振り返ると、両手でぎゅっとアリシアの手を握った。

「素敵なドレスを作ってお届けいたしますわ！」

「ええ、楽しみにしているわ」

アリシアは微笑み、お店を後にした。

さて、帰る前に少しお茶をしていこう。王都で一番人気のカフェがあるのだ。そこは大通りに面したオープンテラスのある店であり、紅茶の種類が豊富だと評判のお店でもある。最近は何かを楽しんでばかりで何かを楽しむということもできていなかったから、気分転換でもしよう。ここから距離も近いし、ちょうど良いだろう。

「ティーハウスへ行くわ。馬車を出してちょうだい」

アリシアが御者に指示を出すと、馬車は再び動き出した。

数分後、アリシアを乗せた馬車が到着した。店に入ると、落ち着いた雰囲気の良い香りが漂ってくる。店内では会話を楽しむ女性たちの囁き声があちこちで聞こえてくる。けれど席が埋まってしまっていて、空いているところはなさそうだ。どうしたものかと思案していると、後ろから声をかけられた。

「アリシア嬢、奇遇だな」

「……ご機嫌よう、クラム殿下」

振り向くとそこには、攻略対象の一人であり帝国の王子のクラム・エイヴァリーがいた。褐色の肌に、月光のような白銀の髪、深い海を思わせる碧眼を持つ美青年だ。ちなみに帝国というのは、友好国の一つであるヒュバリー帝国のことである。彼はその第七王子であるのだが、留学という形で我が国に来ているというわけである。

「こっちで一緒に茶を飲まないか？ちようど今一緒に茶を飲んでたご令嬢が帰られてな。空いたんだ」

そういう彼の頬はよく見れば、赤い紅葉がついている。どうやらビンタされたらしい。なんとも気まずい状況にアリシアの顔が引きつる。クラムは軽薄な女たらしで、気に入った女性を見つければすぐに口説こうとする節操なしの男、という設定だ。攻略していくうちに彼本来の思慮深さを知り、最終的にはヒロインに心の内を打ち明けて結ばれる、というのがルートの内容である。今回はシャロットとの交流もないようだし、女たらしなだけあってすでに何人かの女性に手を出しているのだろう。しかしまさかここで会うとは……。

「……いえ、私は」

「いいじゃないか、遠慮しないでくれ」

断ろうとしたアリシアだったが、さっと手を取られエスコートされる形で席に座らされてしまう。

「このアッサムは最高なんだぜ？君もきつと好きになるはずだ」

「は、はあ……」

にっこりと笑うと、慣れた手つきでメニューを開く。そして勝手に注文してしまうと、アリシアに向かってウインクをした。

「なあに、心配はいらないよ。俺が払うし、君の分は奢るさ。アリシア嬢とはぜひ話してみたいと思ってたんだ」

そう言うと、人懐こい笑みを浮かべてみせる。私はその言葉と態度に何と言っていいのか分からず困惑していた。こういう時はなんて返せばよかったのかしら……。そんなことを考えていると、店員が紅茶とケーキを運んでくる。すると、彼がこちらを見て言った。

「ほら、冷めないうちに召し上がれ」

「……いただきます」

仕方がないので、一口飲む。うん、確かに美味しい。味も香りも素晴らしい。私も普段からよく飲んでいるが、この店の物はその中でも特にお気に入りの部類に入る。それを堪能して顔を上げると、じっと見つめられていることに気がついてギョツとした。

「……あの？」

「ああ、すまん。本当に可愛らしいなって思ってたね。つい見惚れてしまった」

「……………」

褒められるのは嬉しいが、相手は男だし婚約者もいる身なので複雑だ。それにこんな公衆の場で可愛いと言われても反応に困ってしまふ。私が何も言わずに黙っていると、クラムは苦笑いをした。

「失礼。いや、話したいことがあったのは本当だよ」

そう言っつて、真剣な表情でまっすぐに見つめられドキリとする。

「君が学会で発表していた『魔力の指向性』についての論文を読んだ。あれはとても興味深かった」

褐色の指が白い陶器のカップの縁をなぞりながら、淡々と話す。

「俺も魔法には詳しい方だと思ってる。けど君は、今まで誰も思いつかなかったような視点から魔法を捉えていた。それがとても新鮮だったんだ」

静かな港を思わせるような瞳の奥に、ほんの少しの熱が灯ったように見えた。ただそれは人に対する情念とかではなく、知的好奇心のようなもののように感じられた。たしか、彼は家の事情で魔力の研究をしていたはずだから、単純にアリシアの発想に興味を持つたということだろうか。

女性に対する好意とかではなくてほっとした。

「魔力は魔素によって構成されており、またその流れも一定ではありません。けれど私たちは何かに対して魔法を行使するとき、その方向性を決めて力を行使することができます。これは私たちが無意識のうちに、自分の中に流れる力を認識し、操作しているからですわ」

「ほう、興味深いな。つまり、人間は自分の中にある力を認識できていて、しかも無意識にそれを操作する術を知っているということだな」

「ええ、ですから——」

アリシアとクラムはその後もしばらく、魔法のことについて語り合った。最初は甘い顔を残したままだったクラムも徐々に真剣に耳を傾けるようになり、途中からは研究者としての議論へと発展していった。時たま、自分にはない発想に驚いたように目を丸くしたり、質問してきたりした。その姿は年相応で、アリシアは好感を持った。

「……ああ、もうこんな時間か」

ふと時計を見ると時刻はすでに六時半を過ぎていた。窓の外を見れば、すでに日が落ちかけている。随分と話し込んでいたようだ。気づけば店にいた他の客たちもほとんどいなくなって、残っているのはほとんどがカップルばかりだった。

「申し訳ありません。長居してしまいましたわ」

「いや、構わない。むしろ、もっと話したかったくらいだ」

名残惜しそうな様子のクラムに微笑んで、アリシアはお礼を言った。

「では、そろそろお暇させていただきます」

「……ああ、見送りだけでもさせてくれ」

クラムが立ち上がり、アリシアに手を貸そうと手を差し出す。はじめと違ってその手を取ることに抵抗はなかった。馬車まで送る道すがら、二人はとりとめのない会話を交わした。

「アリシア嬢、今日は可愛らしい君に会えて良かった」

外に出たクラムはいつもの調子を取り戻したのか、意味のない甘い言葉を投げかけてくる。ずっとさっきのままでいてくれた方がよかったかもしれないと思いつつ、それを取り繕うようにまわる口が可愛く思えてしまった。

「ええ、私も楽しかったわ」

「……じゃあ、また機会があったら一緒にお茶でも飲んでくれるかい？」

「ええ、そうね。次は、」

クラムの誘いに返事をしようとした時、彼の肩越しに見覚えのある姿を見つけた。

「ウィルバート様、」

通りを挟んだ向かい。そこに立っているのはウィルバートだった。しかもがっつりアリシアと目が合っている。

「……………」

私は慌てて視線をそらした。しかし、遅かったようで彼は行きかう馬車をものともせず、こちらに向かってきた。

「アリシア」

「あ、はい」

「この後用事がなければ送っていかうと思うのだが、どうだい？」

「いえ、大丈夫です。一人で帰れます」

「そう言わないでくれよ。君に話したいことがあるんだ」

私の目の前に立ったウィルバートはいつもの笑みを浮かべている。しかしその目は、まったく笑ってはいなかった。クラムもウィルバートの気迫に押されているのか、口を挟まず成りゆきを見ているようだった。

「……わかりましたわ」

（……これは、断れない）

先ほどのやり取りもあってなんと断りづらい状況だ。私が渋々了承すると、ウィルバートは満足そうに口角を上げた。

「あの、どちらに向かわれるのですか？ 我が家は反対方向ですよ」

「……こっちでいいんだ」

「……そうですか」

そうして馬車で連れて来られたのは、大通りから外れた場所にひっそりとある屋敷の前だった。

「ここは、どなたかのお宅でしょうか？」

「……さあ、入ってみればわかるよ」

「……」

促されるまま、門の中に入ると玄関に続く石畳の道が現れた。よく手入れされているのか雑草もなく綺麗だ。そしてその両脇には、左右対称になるように緑の庭が広がっている。華やかさはないが、丁寧に整えられた様子が伺える庭園だ。

「あの、この家はいったい……」

不安になりながら問いかけるが、彼は答えることなくドアを開いた。中は明かりが灯っているものの人の気配はしない。

「誰もいないのですか？」

「うん、今はね」

「は？」

「とりあえず中に入ろうか」

有無を言わせぬ口調に気圧され、言われるままに中に入る。後ろ手に扉が閉まる音が聞こえた。

(どうということ?)

戸惑う私を置き去りにして、彼が奥の部屋へと向かう。私は黙ったままその後について行った。

「ここだよ」

通されたのは応接間のような部屋だったが、中央にテーブルはなく、代わりに大きなベッドが置かれていた。天蓋付きの豪華なものだ。彼はその前で立ち止まると、振り返り妖しく笑う。

「君は本当に可愛いよね」

「は、」

「本当に可愛い。だから周りの男が放っておかないんだよ」

突然、腕を強く掴まれる。痛みに顔をしかめるも、彼は気にすることもなくそのまま引っ張られ、ベッドに押し倒された。

「きゃあっ！」

「本当はもう少し時間をかけて落とすつもりだったんだけどね」

上から覆いかぶさるように見下ろされて、身動きが取れなくなる。

「ちよ、ちよっと待ってください！何言ってる——」

「君は僕のものになるべきだ。君の家にとっても、国にとってもそれが最上の選択なんだよ」

私の言葉を遮って捲し立てるように言うと、彼の顔が迫ってきた。

反射的にギョッと目を瞑ると、唇に柔らかいものが触れる感触が伝わってくる。キスされたのだと気づいたのは、しばらく経ってからのことだった。

「んうっ!?」

驚きのあまり開いた口に、舌がねじ込まれる。生暖かい肉が口内に侵入してきて、口の中がいっぱいになった。息苦しさに頭がぼうつとしてくる。

「ふ、う……」

やっと解放された時には、もう全身の力を奪われていた。そんな様子の私を見て、ウィルバートは愉快そうに笑い声をあげる。

「……可愛いアリシア」

「ウイ、ウィルバート様……?何をなさるおつもりですか……」

やっとのことと口から出た言葉は、か細く震えていた。

両手を頭の上で抑えられ、シーツの上に転がっている私の姿はさぞ哀れに映るだろう。天蓋を背にアリシアを見下ろすウィルバートは微笑みながら言った。

「何って、男女がベッドの上ですることなど一つしかないでしょう?」

あけすけな物言いに私は顔に熱が集まるのを感じた。いくら婚約者と言えども、婚姻関係を結んでいない以上、この行為は許されな
い。

「お止め下さい！これは許されない行為です。どうか思いとどまって……」

必死に訴えるもウィルバートは聞く耳を持たないようだ。むしろ私の抵抗を面白がっているようにも見える。

「アリシアが悪いんですよ？他の男と無防備に笑い、それどころか私から逃れようとさえしたのですから」

押さえつける指に力が入り、顔を顰める。彼の言っていることの意味が理解できずに私は困惑した。私はただヒロインが彼のルートに入ったのが分かり、ウィルバートとの接触を最小限に抑えようとしただけだ。それに彼だって嬉しそうに話しかけるヒロインに満更でもなさそうな顔をしていたではないか。

ウィルバートは私の上に跨り、顔を近づけてきた。端正な顔が間近に迫り、心臓が早鐘を打つ。彼は私の耳元に唇を寄せると囁いた。

「絶対に逃がさない。例え、君が私から離れたいと願っても」

ゾクツと背筋が震えた。彼の瞳には狂気の色が滲んでいるように見えたからだ。このままではまずいと思い私は身を振るがビクともしない。それどころか更に強く押さえつけられてしまう始末だ。

「ウイルバート様、おやめください！」

必死に訴えるが彼は聞く耳を持たず、私の首筋に吸い付いた。チクツとした痛みを感じると同時に生温かいものが這う感覚を覚える。それが舌だと分かった瞬間頭が沸騰したように熱くなった。恥ずかしさのあまり涙目になる私を見て彼は満足そうな笑みを浮かべると今度は鎖骨の辺りを強く吸った。ピリツとした痛みが走り顔を歪めると、今度は労るように舐められる。まるで肉食獣に捕食されているような気分になり恐怖を感じた私は思わず悲鳴を上げた。しかしウイルバートは私の声に煽られたように何度も同じ場所に吸い付き赤い跡を残していった。やがて満足したのか彼はゆっくりと身体を起こした。

「はは、これでは誰にも肌を見せられませんね」

そう言ってウイルバートは目を細めて笑う。琥珀色の双眸はどろりとした欲望に濡れていて、まるで別人のように見えた。私は恐怖を感じずにはいられなかった。

「ウイル、バート様……」

震える声で呼びかけると彼は優しい手つきで私の頬を撫でた。まるで壊れ物を扱うかのような手つきだったが、その瞳には獲物を捕らえた獣のような表情が浮かんでいる。私は思わず息を呑んだ。それを見た彼はくすりと笑うと私に覆い被さってきた。

「大丈夫ですよ、優しくしますから」

そう言うと言を重ねてきた。最初は触れるだけの軽いものだったが次第に深くなっていくにつれて息苦しさを覚えた私は酸素を求めて口を開くとすかさず舌が侵入してきた。逃げようとする舌を追いかけられ絡め取られると強く吸われると同時に甘噛みされて腰がびくりと跳ねた。歯列をなぞられた後上顎の裏を擦られると背筋に甘い痺れが走る。何度も角度を変えながら貪るように口内を犯し続けるウィルバートに私は為す術もなく翻弄されていた。やがて満足したのか彼はゆっくりと顔を離すと妖艶な笑みを浮かべて言った。

「ふふ……可愛いですね」

そう言うって私の髪を一房掬うとその髪にも口づけを落とした。まるで恋人にするかのような仕草に愛されていると勘違いしてしまいそうになるが、すぐに我に返ると慌てて首を横に振った。

「、どうかお止め下さい。貴方はこんなことをするお方ではないはずですよ！」

そんな私の言葉にウィルバートは面白がるような表情を浮かべた後、目を細めて言った。

「君が思う私がどのような男かは知りませんが、高潔な君を犯して穢したいと思う私が本当の私なのですよ」

そう言って彼はドレスの中に手を滑り込ませてきた。ドロワーズの内側から覗く素肌を撫で上げられ、ぞくりとした感覚が背中を走る。

「あっ……っ！」

思わず声を上げると彼はクスリと笑った。そして今度は太腿の内側をなぞり上げるように触れてくる。くすぐったいようなもどかしい感覚に襲われ身を振ると彼は楽しげに目を細めた。

「おや、感じていますね？可愛い人だ」

そう言うと彼は太腿の付け根の際どい部分に触れてきた。現代の下着と比べて機能性のみ重視されたドロワーズは股を覆う構造をしておらず、秘部を晒すようなデザインをしている。守るものなど何も無い。

彼の手を阻もうと脚を閉じるも逆に彼の手を挟むような形になってしまい逆効果だった。彼は私の秘部の形を確かめるようにゆっくりと指を動かすと秘部の上にある芽に軽く触れた。その瞬間ビクンと腰が跳ね上がる。

「んっ！」

思わず出た声に慌てて口を閉じるが遅かったようだ。ウィルバートはニヤリと笑うと執拗にその部分を責め立て始めた。円を描くようにクルクルとなぞったり、軽く押し潰したりされると次第に甘い痺れが身体中に広がっていくのを感じた。

「やあっ……あっ、だめっ」

「……無垢なはずなのにこんなに感じてしまうなんて、些か心配になりますね」

ウィルバートは呆れたように呟くと、今度は陰核を摘んだり引っ掻いたりしてきた。その度に強い快感に襲われて私はビクビクと痙攣するように身体を震わせた。

「ひっ……あああっ！それ、だめえっ」

「駄目ではないでしょう？こんなに濡らしておいて」

彼はそう言って私の秘部を指で撫でる。クチュリという水音が聞こえ、羞恥に顔が真っ赤に染まるのを感じた。ウィルバートは私の反応を楽しむかのように執拗にそこを責め立てた。

「あう、やあっ……」

「ふふ、可愛いですね」

彼はそう言う私の耳に唇を寄せてきた。吐息がかかるだけで感じてしまいそうになるほど敏感になっていた私はビクビクと身体を震わせた。

「ドレスが苦しいでしょう？今楽にして差し上げますよ」

そう言う彼は私をうつ伏せに寝かせ、ボタンを外し始めた。いつの間に両手の拘束は解かれていたが、熱で浮かされた頭では抵抗する気力など無く、ただされるがままになっていた。コルセットまで外されシュミーズとドロワーズのみの姿になった私は羞恥心からシーツを握り、顔を逸らすことしかできなかった。ウィルバートはそんな私の様子を見てクスリと笑うと、首筋に指を這わせてきた。

「ドレスを身に纏った君はまるで宝石のように美しいが、白だけを身に纏った今の君は天使のようだ」

そう言う彼は指を下に滑らせる。シュミーズの上から身体のラインに沿ってなぞられ、ぞくりとした快感に襲われる。やがてその手は胸まで移動し、頂に触れた。

「んっ」